

灯火ともしび

アンネローゼがフリードリヒ四世の許可で休暇を過ごすべく、厳冬期のフロイデン山系へ向かったのは帝国暦四八一年初のことである。衆知の通り、フロイデン山系の春は帝都に遅れること二ヶ月、冬は先立つこと二ヶ月と言われる。一月のフロイデン山系は全山が白亜の装いに姿を変えており、山系の中腹にほど近い位置にあるアンネローゼの山荘も、厚い雪化粧のただ中にある。

ただ、この前年末にはフリードリヒ四世自身がフロイデン山系に行幸したこともあって、貴族の山荘周辺の除雪は例年になく念入りなものとなっていた。アンネローゼの山荘までの道路も左右に雪の壁を築きつつも、完全に確保されており、一週間ほどの滞在であればまったく生活に支障はない旨が皇帝の許へ奏上されていた。

「真冬のフロイデンで過ごしたいとは、そなたにそのような酔狂なところがあるとは、思つてもみなんだな」

「弟が雪の山を見たいと申しまして。」「無理を申し上げました」

「ほう、弟が。そなたの弟は雪を知らぬか？」

「知つてはおりますが、一面を埋め尽くして、建物までを沈めてしまつような雪は存じません。一度でよいから、そのようなところで数日を過ごしたいと」

「そつが、一面の雪を見たいか」

フリードリヒ四世は珍しく上機嫌で笑い、アンネローゼの願いを許した。

「ならば良からう。行つて参れ」

ラインハルトが、アンネローゼに真冬のフロイデン滞在をねだつたのは事実であるが、理由は一向に牧歌的なものではない。

ラインハルト・フォン・ミューゼル、帝国暦四八一年初にはまだ一四歳までに二ヶ月あまりを残しているが、既に帝国軍幼年学校の四年次の三分の二を了えている。一二歳頃から伸び始めた身長は、急激にその伸び率を高め、上背だけを見ればすでに少年期を過ぎかけている印象すら与える。四年次に上がつてからは、幼年学校の教程をただ単にこなしていくだけの毎日を潔しとせず、首席の特権で士官学校のクラスに参加して戦術字を、課外教程では機械車両の操作技能を習得するのに余念がない。

一方、ラインハルトに影のように付き従つ赤毛の少年ジークフリード・キルヒアイスもまた、ラインハルトに従つて士官学校の講義に加わり、課外での車両整備、武器操作の習熟に動しんでいる。

そんな彼らが幼年学校卒業後の進路を問われたのが数ヶ月前で、これは最終年次の五年次に進む幼年学校生徒全員に対する設問だった。多くが士官学校受験を志望する中、ラインハルトとキルヒアイスは卒業と同時の任官と、最前線への配属の希望を提出していたのだ。

「今、最前線となると惑星カプチュラン力になるが、それでも良いのか？」

彼らには、皇帝からの内意として、近衛付き武官の地位、もしくは士官学校の優先枠入学を近い将来の進路として示されていた。

他者にとつて垂涎の的とも言つべき、しかも『皇帝陛下のご内意』といつらびやかな装飾まで施された、これらの選択肢を一蹴した少年達の可愛げのなさは、教官の悪意を大いに刺激したに違いなかった。零下四〇度の酷寒の惑星だ。吐く息すら瞬時に凍り、出血がそのまま紅い氷柱に変わるようなそんな惑星だが、それでも敢えて志願するのか。教官

の反問は、あるいは齷しだったのかも知れない。

ラインハルトにしてみれば、最前線を希望する以上、激戦地であつてほしいわけであり、更に気候的な困難さが加わるなら、一層の難戦地となり得る。ラインハルトの論法で行けば、難戦になればなるだけ戦功を上げる機会が増えるわけであり、戦功を上げれば昇進も速くなる。

『早く一人前になって、姉上を救け出しに行く』

前半部はともかく、後半部は公言できることではなかったが、ラインハルトの目的もまた、達成までの期間を短縮できようというものであつた。この際、ラインハルトが自身の戦死や敗北の可能性をまったく考慮の外に置いているのは、他者から見れば増長慢の極みといふべきだが、それは正しい見方とは言えなかつた。どのような場合であれ、ラインハルトは目的を達するための人念な下準備を怠らなかつた。

「戦略や戦術は自得するものだ。学校で学んでどうこうできるものではない」

これは、ラインハルト自身が提督の地位を得てからの言葉と伝えられるが、それでも彼が無理に時間を作つても士官学校の戦術や戦略の講義を受講したのにも理由があつた。

「何事にも定石というものがあるし、型というものがある。それらを学んでおくことは無駄ではない」

と言つたもので、ただし、ラインハルトの場合は、定石や型を学ぶことでそれらに倣つたのではなく、他者がそれらに拘り、縛られることを見越してのことだつたとも言えよう。

彼がアンネローゼに、真冬のフロイデン行きを希望したのも、カプチュランカの名を示されたことと完全には無関係ではなかつた。この時期、ラインハルトの興味の一端が、寒冷地の更に厳冬の気候というものに向けられていたのもまた事実だつたのだから。

ただし、これは、アンネローゼと、ラインハルトとその人生の軌跡の鼻祖を誓つた赤毛の少年だけが知ることだが、ラインハルトは姉と親友との三人だけで、短い休暇を水入らずで過ごせる場所を望んだといふのが最大の理由だつたのだ。それが厳冬のフロイデン山中であつたのは、完全な偶然ではないにしても、その比率が著しく大きかつたことだけは確かなことだつた。

ともあれ、四八一年の年が明け、宮廷での儀式が一通り済んだ一月の三日の朝、アンネローゼは西苑を訪れた弟と、弟の親友とともに、フロイデンへ向かう地上車の車中の人となつた。

新無憂宮から地上車で六時間。航空機の飛行を禁じられているフロイデン山系への距離は、今も八年前も変わっていない。

道中、ラインハルトとキルヒアイスが交替で話し手を務めた。休みの日に寮を飛び出して、屋台の店で鱒のホイル焼きを頬張つたこと。校庭で繰り広げられた雪合戦では、常に二人を目の敵にする上級生の顔面にしこたま雪玉を振る舞つてやったこと。美術のクラスの教官が、ラインハルトの絵に無礼さわる論評を下したこと等々……アンネローゼは、いつものことではあつたけれども専ら聞き役に回ることになつた。彼女自身が持てる話題と言え、後宮の出来事に限られている。聞き手たるべき二人の少年が、そうした話題を歓迎するかどうか程度の判断のできないアンネローゼではない。

「今度、ライセンスを取つたんですよ、姉上」

ラインハルトが自慢げに見せたのが、軍用車両の操作ライセンスだつた。

「まあ……それじゃ、車が運転できるのね？」